

レビ記2章 「いのちの実を献げる」

1A 上等の小麦粉 1-3

2A 作った物 4-10

3A 塩の味付け 11-13

4A 炒った穀粒 14-16

本文

私たちは、前回からレビ記の学びを始めています。レビ記においての主題は、「聖め」です。主が聖なる方であるように、私たちも聖なる者とならなければいけないという命令があります。私たちは前回、じっくりと、聖めというものが、単に品行方正な生活ではないことを学びました。それは初めに、主ご自身の命令を聖霊のご臨在の中で聞いていることそのものであることを知りました。それから、1章にあります、献げることです。神が御子にあって、私たちに全てを献げてくださいました。その憐れみに応答します。私たちが自分自身の全てを明け渡すのです。その全てを献げるのが、

そこで、キリストが全てを献げられたこと、十字架の死に至るまで父なる神に従われました。そして、その従順の先には、神のよみがえりの命があります。神がキリストを死者の中からよみがえらせました。そこで、レビ記 2章には、すべてを献げる、全焼のいけにえと共に、穀物のささげ物があることを見ていきます。

1A 上等の小麦粉 1-3

¹ 人が主に穀物のささげ物を献げるとき、そのささげ物は小麦粉でなければならない。その上に油を注ぎ、その上に乳香を添え、² それを祭司であるアロンの子らのところに持って行く。祭司はその中から、ひとつかみの小麦粉と油と乳香すべてを覚えの分として取り出し、祭壇の上で焼いて煙にする。これは主への食物のささげ物、芳ばしい香りである。³ その穀物のささげ物の残りはアロンとその子らのものとなる。それは主への食物のささげ物のうちの、最も聖なるものである。

穀物の献げ物は、単独で献げる時もあります。罪の清めのためのいけにえで、非常に貧しい人が山場とや家鳩を献げる余裕もない時に、献げます。けれども、その他はありません。私たちが前回学びましたように、主に對するささげ物は、血が流されるいけにえです。血が流されることによって、罪が清められるからです。

穀物というのは、いのちの象徴です。種が地面に落ちて、地の中で芽となり、茎が出て来て、葉を茂られ、実となります。そこには、神が成長してくださる過程があります。人がどんなに耕し、水

を与え、肥料を与え、雑草を取るというような労苦が伴っていても、成長させ、実を結ばせるということには、何ら関わることはできません。そこには神ご自身のいのちがあるからです。神が関わる以外に育つ方法はありません。それで、いのちを示しています。

そこでイエス様が言われたことに注目してみたいと思います。「わたしがいのちのパンです。(ヨハネ 6:35)」と言われました。主ご自身の生涯が、そのいのちのパンと言ってよいでしょう。御霊がこの方の上に降られました。そして、聖霊によって、恵みの業を成し遂げられました。父なる神に祈られました。福音書に出てくる、イエスの御姿です。そして、主は、十字架の道を進まれました。この方がいのちを献げられて、十字架の上で死なれました。しかし、神はこの方のいのちを、取り戻して下さいます。この方のいのちが、すべてを献げた死の中から生まれました。死ぬことによって、いのちを与える方となったのです。「ヨハ 12:24 まことに、まことに、あなたがたに言います。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままです。しかし、死ぬなら、豊かな実を結びます。」

パウロは、宣教の働きをしている中で、このキリストの死といのちが自分の内に働いていることを語りました。自分の中にキリストの死が働き、死が働いているから、キリストのいのちも働いていることを話しました。「Ⅱコリ 4:10-11 私たちは、いつもイエスの死を身に帯びています。それはまた、イエスのいのちが私たちの身に現れるためです。私たち生きている者は、イエスのために絶えず死に渡されています。それはまた、イエスのいのちが私たちの死ぬべき肉体において現れるためです。」パウロは、苦しめられました。その中で自分に死んで行きました。しかし、すべてを主に明け渡しました。その中で、窮することはありませんでした。キリストのいのちが、働いていたのです。このようにして、自分に全て献げて、明け渡すことによって、むしろ生きることができます。

これが、全焼のいけにえの次に穀物のささげ物をする所以です。すべてを火で焼かれる、いけにえがあって、そこに穀物といのちを献げます。同じように、私たちの献身にあるキリストの死に、キリストのいのちが働きます。主がよみがえられた時に、御使いが女たちに伝えた言葉を思い出して下さい。「マタ 28:7 そして、急いで行って弟子たちに伝えなさい。『イエスは死人の中からよみがえられました。そして、あなたがたより先にガリラヤに行かれます。そこでお会いできます』と。」ガリラヤで宣教を主が行われた時の、いのちにみなぎったそのお姿を、主は、よみがえられた後に弟子たちに現して下さったのです。そのいのちをもって、聖霊の力によって、使徒たちは、みことばを伝える働きをしました。

したがって穀物のささげ物は、キリストご自身のいのちと、キリストにある私たちの命を表します。この、ささげ物にはいくつかの形のささげ方がありますが、基本は小麦粉そのものを献げることです。共同訳には「上質の小麦粉」とあり、最善を主に捧げます。そして、その上に「油」を注ぎます。

さらに「乳香」も捧げます。乳香は、中東地域で採取できる木から取れる樹液を固めたものです。

アラブ人は、コーヒーを飲むときに、これに火を焚いて、部屋を甘酸っぱい匂いで立ち込ませるそうです。食べることもできるそうで、グミのようなもので、爽やかな感じがするそうです。イエス様が葬られた時に女たちは、同種の香料である没薬も使った香料を携えたと考えられますが、死臭を打ち消すためにも用いられました。

そして、油を注ぎ、乳香を使って小麦粉一握みを祭壇の上で焼きます。それが「**覚えの分**」つまり主に覚えられるものとなり、全焼のいけにえと同じく主にとって宥めの香りとなるのです。そして、残り的小麦粉は祭司のものとなります(6:16-18)。祭司は、これを最も聖なる物として食べます。これは、ちょうど聖餐式と同じです。

「**油**」は、聖書には聖霊の働きとしての比喻として登場します。ゼカリヤ書 4 章に出てくる燭台のともし火皿に、直接オリーブの木から油が注がれていましたが、それは主の御霊を表していました。「ゼカ 4:6 彼は私にこう答えた。「これは、ゼルバベルへの【主】のことばだ。『権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって』と万軍の【主】は言われる。」イエスの働きには、ご聖霊の働きがありました。イエス様がナザレの会堂にて、イザヤ書 61 章を朗読されました。「ルカ 4:18-19 「主の霊がわたしの上にある。貧しい人に良い知らせを伝えるため、主はわたしに油を注ぎ、わたしを遣わされた。捕らわれ人には解放を、目の見えない人には目の開かれることを告げ、虐げられている人を自由の身とし、主の恵みの年を告げるために。」」そして、これが「あなたがたが聞いたとおり実現しました。」と言われたのです。主の御霊の働きによって、イエスが数ある癒しと福音宣教と、罪の赦しと、束縛からの解放などの恵みをくださったのです。

そして私たちがキリストのうちにいるなら、このキリストの御霊が私たちの上にあります。私たちのうちで、私たちを通して御霊の業が力強く行われるのです。私たちがいかに、聖霊を意識した生活をしているのでしょうか？自分の知恵、自分の力で生きていて、それでキリスト者らしく生きることが、時にすばらしいように見えます。けれども、そこにはパリサイ的な偽善が入ります。外は良くても、中身は異なっています。何よりも、キリストのように生きる時に、聖霊の働きがあるからこそ、そこには恵みが残るのです。人々は、主イエスの働きを見て、神をほめたたえました。同じように聖霊に満たされている時、自分自身ではない、キリストのいのちが現れるからです。

そして「**乳香**」についてですが、香壇から至聖所に入る煙は、聖徒たちの祈りを表しています。「黙 5:8b 彼らはそれぞれ、豎琴と、香に満ちた金の鉢を持っていた。香は聖徒たちの祈りであった。」同じようにキリストは、地上の生活の間、いつも父なる神に祈っておられました。夜を明かして祈られたこともあります。そこから出てくる命は父なる神に覚えられ、まことに芳しかったのです。私たちも同じように、御霊の影響下にある生活を送り、絶えず祈る姿を神がご覧になるときに、それを覚えておられ、快く受け入れておられるのです。

2B 作った物 4-10

次はパンとして焼く場合の捧げ物についての教えです。

⁴ あなたがかまどで焼いた穀物のささげ物を献げる場合には、油を混ぜた小麦粉の、種なしの輪形パン、あるいは油を塗った、種なしの薄焼きパンとする。⁵ また、あなたのささげ物が、平鍋の上で焼いた穀物のささげ物である場合には、油を混ぜた小麦粉の、種なしのものでなければならぬ。⁶ あなたはそれを粉々に砕いて、その上に油を注ぎなさい。これは穀物のささげ物である。⁷ また、鍋で作る穀物のささげ物は、油を混ぜた小麦粉で作る。⁸ あなたは、これらの物で作られた穀物のささげ物を主のもとに携えて行く。それをあなたが祭司のところに持って行き、祭司はそれを祭壇に献げる。⁹ 祭司は、その穀物のささげ物から一部を覚えの分として取り出し、祭壇の上で焼いて煙にする。これは主への食物のささげ物、芳ばしい香りである。¹⁰ 穀物のささげ物の残りはアロンとその子らのものとなる。これは主への食物のささげ物のうちの、最も聖なるものである。

三つの方法が書いてありましたね。一つは、かまどで焼いたもの。もう一つは、平鍋で焼いたもの、つまりフライパンです。そして三つ目は鍋で焼いたものです。主は、イスラエル人の各家庭に合わせて、上等の小麦粉だけでなく、自分たちの持っているものから穀物のささげ物を捧げることができるようにしてくださっています。

ここで共通しているのは、一つはパン種がないことです。パン種とは、イースト菌です。パンなので大抵パン種が入っているのですが、主に献げる時はこれを入れてはいけません。なぜパン種を入れていけないのかは、次の 11-13 節を読んだ後で説明します。

そしてもう一つは油が混ぜられている、あるいは上から注がれていることです。私たちの内におられる御霊は混ぜられている油です。内に働かれる御霊は、私たちに真理を教えてくださいます。ヨハネ第一で、偽教師たちがいても、あなたがたの内に油があるから安心できることを話しています。「Iヨハ 2:20 あなたがたには聖なる方からの注ぎの油があるので、みな真理を知っています。」これが、内に注がれている油です。そして、私たちの上に臨まれる御霊の働きは上から注がれる油です。私たちは使徒の働きで学びましたが、イエス様は復活されて昇天される直前、弟子たちに対して「聖霊があなたがたの上に臨まれると、力を受けます。」と言われました。それは外側に対して働かれる聖霊が、私たちを通してその働きを行われることです。けれども、イエス様を自分の心の内に受け入れた人は、御霊がその人の内に住んでくださいます。救いの確信を与え、愛、喜び、平安を体験することができ、主に心の内での聖霊の働きであります。

そして興味深いのが、平鍋のパンは粉々に砕いて油を注ぐことです。詩篇 51 篇でダビデが、ベテ・シェバとの姦淫の罪をナタンに指摘された後で歌ったとき、こう言いました。「51:17 神へのいけにえは砕かれた霊。打たれ砕かれた心。神よあなたはそれを蔑まれません。」私たちが自分の

命を神に差し出す際に、このように砕かれた魂を御前に持ってくる時に主が聖霊で私たちに満たしてくださることが分かります。

3B 塩の味付け 11-13

¹¹ あなたがたが主に献げる穀物のささげ物はみな、パン種を入れて作ってはならない。パン種や蜜は、少しであっても、主への食物のささげ物として焼いて煙にしてはならない。¹² それらは初物のささげ物として主に献げることができる。しかしそれらを、芳ばしい香りとして祭壇に献げてはならない。¹³ 穀物のささげ物はみな、塩で味をつけなさい。穀物のささげ物に、あなたの神の契約の塩を欠かしてはならない。あなたのどのささげ物も、塩をかけて献げなければならない。

穀物のささげ物で入れてはいけないのは、パン種と蜜です。そして入れなければいけないのは、塩です。五旬節の時は、初物の小麦によって焼いた、パン種のはいったパンを献げます。けれども、それは火で焼いて献げるものではなく、ただ主の前で揺り動かすものです。

なぜでしょうか？まず、パン種は、いつも聖書において悪い意味で使われます。パリサイ人や律法学者の教えをイエス様はパン種と呼ばれました。使徒パウロは、コリントにある教会で罪が許容されているときに、「わずかなパン種が、こねた粉全体をふくらませることを、あなたがたは知らないのですか。(1コリント 5:6)」と言いました。キリスト者としての生活の中に、悪いものをそのままにしておいてはいけません。パン種は、腐敗を促進させる効果を持っています。その反面、塩は腐敗の進行を遅らせる力を持っています。この世がいかに悪くならうとも、それが極度に悪くなるのを防いでいるのは、イエス・キリストの福音の中にある聖さなのです。

次に蜜について考えます。先ほどの乳香とともに考えてみましょう。蜜は私たちに即効で栄養を与えてくれるものです。聖書では蜜は、豊かさの象徴になっています。もちろん乳香と塩も、生活において必需品ですが、その違いは「火」を通すとどうなるか、ということです。蜜はただ焦げてしまい、だめになってしまいます。けれども乳香は火を通すとかえってよい香を出します。塩も炒め物に使う調味料であり、火に耐えるものです。

したがって、私たちがこの地上において試練という火をくぐっても、なおそこに実質的な命が残っているかどうかを考えて見ればよいでしょう。平常は蜜のように甘くても、乳香のように香を強く出すことはないかもしれません。けれども試練の時に、キリスト者の信仰は非常に強い香を放ちます。乳香は、祈りを示していますが、火のような試練の時に献げる祈りは、主の前に立ち上ります。

そしてキリスト者は、言葉において塩気が付いています。なぜこんな困難の時に、試金石となるような言葉を話すことができるのですか？と驚きます。平常の時には聞こえが良い言葉はこの世にたくさんあります。けれどもイエス様の言葉は、塩気はありますが、甘い食物ではありません。

けれども、人生の本質を語っておられるのです。ゆえに、平常時には即座においしいとは言えないかもしれないです。しかし、人生の根本を揺るがされるときには試金石となるのです。「コロ 4:6 あなたがたのことばが、いつも親切で、塩味の効いたものであるようにしなさい。そうすれば、一人ひとりにどのように答えたらよいか分かります。」

4B 炒った穀粒 14-16

¹⁴ あなたが初穂による穀物のささげ物を主に献げる場合には、火にあぶった穀粒、新穀のひき割り麦を、あなたの初穂による穀物のささげ物として献げなさい。¹⁵ あなたはその上に油を加え、その上に乳香を添える。これは穀物のささげ物である。¹⁶ 祭司は、そのひき割り麦の一部とその油の一部、それにその乳香すべてを覚えの分として焼いて煙にする。これは主への食物のささげ物である。

粉にするのではなく、初穂の穀物をそのまま主に献げる時の教えです。レビ記 23 章にて、過越の祭りの三日目に、初穂の祭りがあります。それは、穀物をそのまま献げます。その時に穀粒をそのまま献げるのではなく、まず火であぶらなければいけません。なぜなら、ここでは全焼のいけにえを献げるわけでないからです。火によるいけにえがなので、この穀物を火に通して献げます。

先ほどの原則、キリストが死ななければ、豊かないのちが与えられない、という原則がやはり働いているのです。(ヨハネ 12:24) イエス様は、ヨハネ 12 章で、続けてこう言われました。「12:25 自分のいのちを愛する者はそれを失い、この世で自分のいのちを憎む者は、それを保って永遠のいのちに至ります。」イエス様が命を捨てられたことによって、命を与えられたように、私たちも自分に死んでいくなかで、キリストの命を持っていく生活を歩んでいくことができます。「自分のいのちを愛する」とは、生活全般のことです。自分の大切にしているものを大切にしていきたいために、キリストの命を軽んじるのであれば、その大切にしていると思っていた命さえもが失われます。けれども、キリストの命を重んじるがゆえに自分が大切に思っているものを二番目、三番目のものとするのであれば、自分は失うどころか、永遠のいのちという本質的な、実質的な命を得ることができるということです。